

縦横無尽 タテとヨコ色とかたちのフィールドワーク(22) : 開口具2 : 輪状綜統と開口保持具1

著者	吉本 忍
雑誌名	月刊染織
巻	292
ページ	58-60
発行年	2005-07-01
URL	http://hdl.handle.net/10502/5222

縦横無尽 タテとヨコの 色とかたち のフィールドワーク

吉本 忍

開口具² 輪状綜統と開口保持具¹

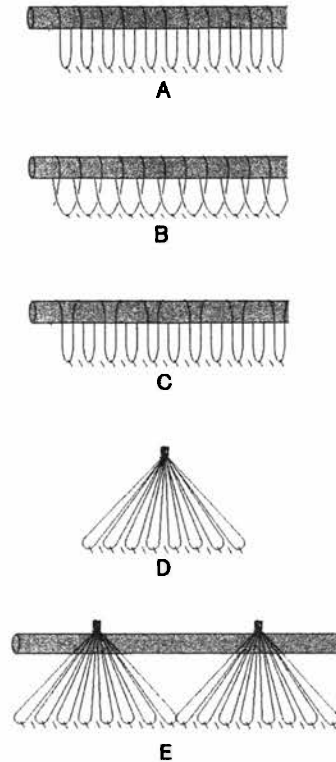


図1 輪状綜統

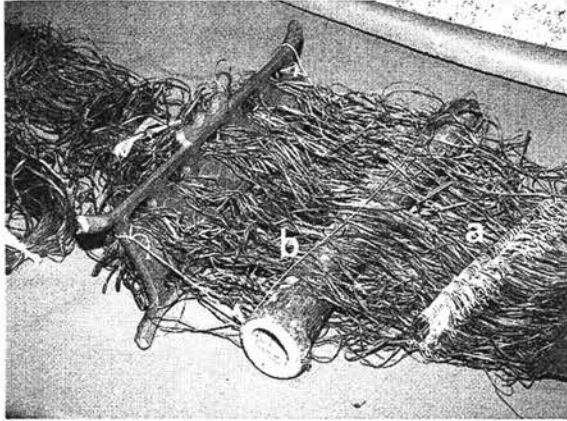


写真1 アイヌの腰機の輪状綜統と開口保持具(のぼりべつクマ牧場蔵)
a. 輪状綜統 b. 開口保持具

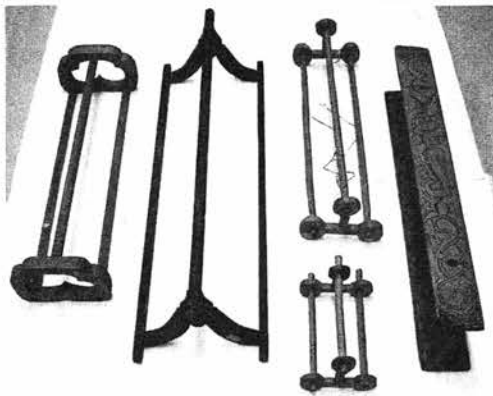


写真2 アイヌの開口保持具(北海道大学北方生物園フィールド科学センター蔵)

織機を構成する部品のひとつである開口具

のうちには、先月号で紹介しているように、1種類の開口保持具と8種類の綜統がある。これらの開口具はタテ糸の開口や逆開口という開口運動をつかさどる機能をそなえている。ただし、綜統はそれ自体でタテ糸の開口と逆開口を繰り返すことが可能であるのに対して、開口保持具はタテ糸を開口させることはできても逆開口させることはできない。そうしたことから、開口保持具は綜統と併用することによってのみタテ糸の開口と逆開口を繰り返すことが可能となり、開口保持具との組み合わせによってタテ糸の開口と逆開口をおこなっている綜統の種類としては輪状綜統が知られている。したがって、今月号からはじまる個別の開口具を紹介するシリーズの初回として、まずは輪状綜統とともに開口保持具をとりあげる。

なお、これまでの連載で記述してきたさまざまな専門用語のうちには、わたしが創案したものが少なからずあり、開口保持具や輪状綜統をはじめとする8種類の綜統の名称もそれらのうちに含まれる。したがって、そうした専門用語の1つ1つは読者の方々にとっては、いずれなじみのないものであるが、そ

れらをあらたに創案したことについては、これまでに使われてきた専門用語、あるいは名称が学術的に適切でないと考えたことや、該当する専門用語や名称が存在していなかったことなどに依っている。もとよりわたしが創案した専門用語が最善であるとは思っておらず、今後に変更もありうるが、当面は前記の事情をご理解していただき、なじみのない名称とおつきあいいただきたい。

輪状綜統のかたちと機能

さまざまな綜統のうちで、輪状綜統は番目綜統とならんで、世界の広範な地域で使用されている。ただし、歴史的に輪状綜統は番目綜統に先行する綜統であったと考えられる。わが国の織機のうちで輪状綜統は、腰機(いざり機)の綜統として使われ、一般に綜統と呼ばれてきた。また、専門用語は半綜統とも呼ばれてきたが、これは高機にそなわっている番目綜統を双綜統と呼びならわしてきたことに対応する名称である。

輪状綜統は、輪状の綜統系によって構成された綜統であり、通常は奇数列、もしくは偶数列のタテ糸が1本ずつ、1つ1つの綜統系の輪に通される。それらのうちには、綜統糸を綜統棒に連続的にかけたしながら輪をかたちづくったもの(図1:A~C)(写真1:a)、輪にした綜統糸を束ねて糸や紐でくくったもの(図1:D)、輪にした綜統糸を束ねて糸や紐でくくり、綜統棒に通したもの(図1:E)などがある。なお、綜統糸を綜統棒に連続的にかけたしながら輪をかたちづくるばあいの綜統糸のかけ方はさまざまであるが、おもなかけ方としては、綜統棒にラセン状に綜統糸をかけたわたしたちのもの(図1:A)、綜統



写真3 単式輪状綜統型（綜統・開口保持具可動式）の開口具をともなった腰機による機織り（インドネシア、バリ島トウンガナン村・1981年）

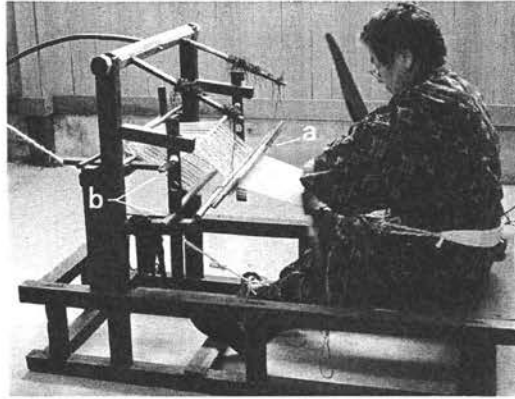


写真4 単式輪状綜統型（綜統可動・開口保持具定置式）の開口具をともなった腰機による機織り（青森市：2003年）

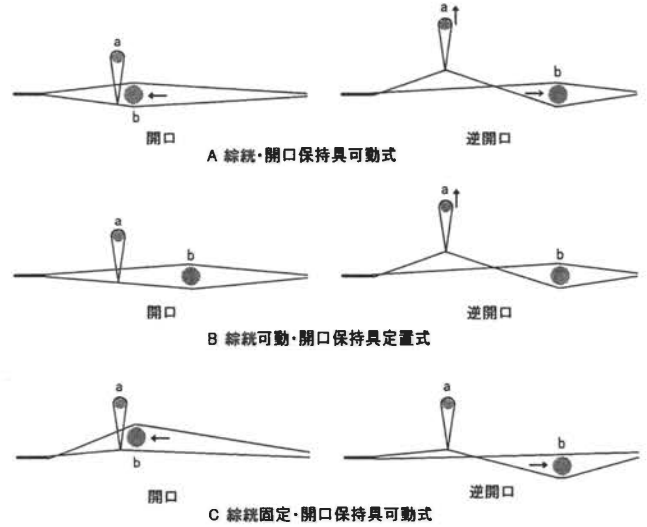


図2 単式輪状綜統型の開口方式
a-輪状綜統、b-開口保持具

棒に綜統糸を8の字を描くように繰り返しながら綜統糸をかけたわたしたちのもの（図1・B）、綜統棒の前後に綜統糸をS字を描くようにして繰り返しながらかけたわたしたちのもの（図1・C）などがある。

このような輪状綜統は片口一方開口機能をそなえた開口具であることから、1枚の輪状綜統のみでは開口と逆開口を繰り返すことができない。輪状綜統を使つてタテ糸の開口と逆開口を繰り返すおこなうためには、2枚の輪状綜統を使用する。1枚の輪状綜統に1本（もしくは1組）の開口保持具を併用する。2枚1組の輪状綜統に2本1組の開口保持具を併用する。あるいは確認されている。なお、輪状綜統には可動式と固定式の設置方式があり、その違いは後述するようにタテ糸の開口と逆開口をおこなうための開口方式に反映している。

開口保持具のかたちと機能

開口保持具は、わが国では一般に中筒なかづつと呼ばれてきた開口具である。世界各地に見いだされる開口保持具のかたちは、棒状、筒状、板状、杵状などをはじめとして多岐にわたっている。一般に個々の民族のもので使われてきた開口保持具のかたちは、さほど多くはないが、アイヌの腰機の開口保持具のかたちはきわめて多様である（写真1・2）。

開口保持具は両口一方開口機能をそなえている。そうした開口保持具は、冒頭でも述べているように、タテ糸を開口させることはできても逆開口させることはできない。したがって、開口保持具をともなった織機で開口と逆開口を繰り返すおこなうためには、輪状綜統が併用されており、それらの開口具で、タ

テ糸の開口と逆開口を繰り返すおこなうためには、1枚の輪状綜統に1本（もしくは1組）の開口保持具を併用した例と、2枚1組の輪状綜統に2本1組の開口保持具を併用した例が確認されている。なお、開口保持具には可動式と定置式の設置方式がある。このうち定置式の設置方式については、固定されたものとともに、腰機のうちに見いだされる紐にながれた開口保持具や、錘りにつなげたタテ糸の先端部分に通された錘り機の開口保持具などの設置方式を包括するものであり、可動式と定置式という設置方式の違いは、後述するように輪状綜統の設置方式とともにタテ糸の開口と逆開口をおこなうための開口方式に反映している。

輪状綜統の開口方式

輪状綜統をともなった開口具の構成には、輪状綜統の枚数と開口保持具の有無によって、単式輪状綜統型、複合単式輪状綜統型、複式輪状綜統型という3型式がある。そして、それらのうちには、輪状綜統と開口保持具の設置方式の違いによって、つぎに列記するような単式輪状綜統型のうちに3種類、複合単式輪状綜統型と複式輪状綜統型に各1種類という、合計5種類の開口方式がある。なお、織機にかけられたタテ糸の角度は、垂直、傾斜、水平とさまざまであるが、ここではタテ糸が水平にかけられ、タテ糸の打ち込みが織り手の側に向かっておこなわれるばあいを想定して記述する。また、タテ糸の開口と逆開口には、さまざまな開口補助具を使用するばあいも少なからず見いだされるが、ここでは開口具のみによる開口運動の基本を説明する。

図3 複合単式輪状綜統型(綜統・開口保持具可動式)の開口方式
a1~a2-輪状綜統、b1~b2-開口保持具

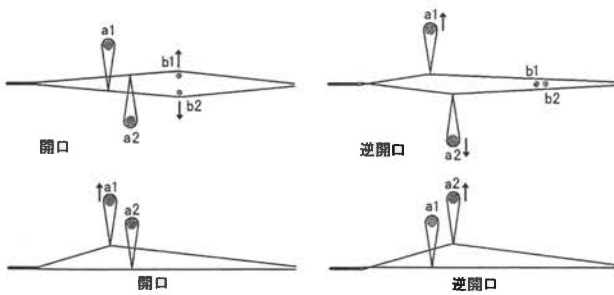


図4 複式輪状綜統型の(綜統可動式)開口方式
a1~a2-輪状綜統

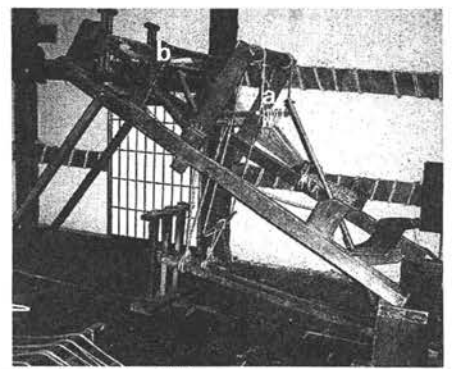


写真5 単式輪状綜統型(綜統可動・開口保持具定置式)の開口具をともなった高機(石川県白山市白峰:白山麓民俗資料館蔵)



写真6 単式輪状綜統型(綜統固定・開口保持具可動式)の開口具をともなった地機によるバドゥイン人の機織り(シリア、アル・サハ:2004年)



写真8 複式輪状綜統型(綜統可動式)の開口具をともなった枠機によるインド人の機織り(インド、マディヤプラデッシュ州:1979年)a1-輪状綜統、a2-輪状綜統



写真7 複合単式輪状綜統型(綜統・開口保持具可動式)の開口具をともなった高機による機織り(長野県原村:1996年)a1~a2-輪状綜統、b1~b2-開口保持具

複式輪状綜統型(綜統可動式)の開口具をともなった枠機によるインド人の機織り(インド、マディヤプラデッシュ州:1979年)a1-輪状綜統、a2-輪状綜統

複合単式輪状綜統型(綜統・開口保持具可動式)の開口具をともなった高機による機織り(長野県原村:1996年)a1~a2-輪状綜統、b1~b2-開口保持具

単式輪状綜統型(綜統固定・開口保持具可動式)の開口具をともなった地機によるバドゥイン人の機織り(シリア、アル・サハ:2004年)

・綜統・開口保持具可動式
可動式の輪状綜統1枚と可動式の開口保持具1本で構成された開口具。この単式輪状綜統型の開口具の設置方式では、開口保持具を手前に引き寄せることによってタテ糸の開口部が拡大されてタテ糸の開口がおこなわれる。そして、開口保持具を遠ざけるとともに、輪状綜統を引き上げることによってタテ糸の逆開口がおこなわれる(図2・A)。このような開口方式はおもに腰機(写真3)に認められるが、足機、地機、枠機のうちにも見いだされる。

・綜統可動・開口保持具定置式
可動式の輪状綜統1枚と定置式の開口保持具1本(もしくは1組)で構成された開口具。この単式輪状綜統型の開口具の設置方式では、開口具を操作しない状態でタテ糸が開口しており、輪状綜統を引き上げることによってタテ糸の逆開口がおこなわれる(図2・B)。このような開口方式は、おもに腰機と錘り機に認められ、わが国の輪状綜統をともなった腰機の多くも、この開口方式である(写真4)。なお、このような開口方式をともなった織機としては、例外的に高機のうちにも見いだされる。そうした高機(写真5)については、石川県の白山麓周辺地域から福井県にかけて使用されてきたことが知られているのみであり、この高機と、後述する基諾族の単式輪状綜統型の腰機、およびわが国の複合単式輪状綜統型の高機などの特殊な織機については、次号であらためて紹介する予定である。

・綜統固定・開口保持具可動式
固定式の輪状綜統1枚と可動式の開口保持具1本で構成された開口具。この単式輪状綜統型の開口具の設置方式では、開口保持具を手前に引き寄せることによってタテ糸の開口

・綜統可動・開口保持具定置式
可動式の輪状綜統1枚と定置式の開口保持具1本(もしくは1組)で構成された開口具。この単式輪状綜統型の開口具の設置方式では、開口具を操作しない状態でタテ糸が開口しており、輪状綜統を引き上げることによってタテ糸の逆開口がおこなわれる(図2・B)。このような開口方式は、おもに腰機と錘り機に認められ、わが国の輪状綜統をともなった腰機の多くも、この開口方式である(写真4)。なお、このような開口方式をともなった織機としては、例外的に高機のうちにも見いだされる。そうした高機(写真5)については、石川県の白山麓周辺地域から福井県にかけて使用されてきたことが知られているのみであり、この高機と、後述する基諾族の単式輪状綜統型の腰機、およびわが国の複合単式輪状綜統型の高機などの特殊な織機については、次号であらためて紹介する予定である。

・綜統固定・開口保持具可動式
固定式の輪状綜統1枚と可動式の開口保持具1本で構成された開口具。この単式輪状綜統型の開口具の設置方式では、開口保持具を手前に引き寄せることによってタテ糸の開口

・綜統・開口保持具可動式
可動式の輪状綜統1枚と可動式の開口保持具1本で構成された開口具。この単式輪状綜統型の開口具の設置方式では、開口保持具を手前に引き寄せることによってタテ糸の開口部が拡大されてタテ糸の開口がおこなわれる。そして、開口保持具を遠ざけるとともに、輪状綜統を引き上げることによってタテ糸の逆開口がおこなわれる(図2・A)。このような開口方式はおもに腰機(写真3)に認められるが、足機、地機、枠機のうちにも見いだされる。

・綜統可動・開口保持具定置式
可動式の輪状綜統1枚と定置式の開口保持具1本(もしくは1組)で構成された開口具。この単式輪状綜統型の開口具の設置方式では、開口具を操作しない状態でタテ糸が開口しており、輪状綜統を引き上げることによってタテ糸の逆開口がおこなわれる(図2・B)。このような開口方式は、おもに腰機と錘り機に認められ、わが国の輪状綜統をともなった腰機の多くも、この開口方式である(写真4)。なお、このような開口方式をともなった織機としては、例外的に高機のうちにも見いだされる。そうした高機(写真5)については、石川県の白山麓周辺地域から福井県にかけて使用されてきたことが知られているのみであり、この高機と、後述する基諾族の単式輪状綜統型の腰機、およびわが国の複合単式輪状綜統型の高機などの特殊な織機については、次号であらためて紹介する予定である。

・綜統固定・開口保持具可動式
固定式の輪状綜統1枚と可動式の開口保持具1本で構成された開口具。この単式輪状綜統型の開口具の設置方式では、開口保持具を手前に引き寄せることによってタテ糸の開口

文献
吉本 忍
1987年「手織機の構造・機能論的分析と分類」
『国立民族学博物館研究報告』12巻2号。
よしもと・しのぶ
(国立民族学博物館 民族文化研究部 教授)

複式輪状綜統型
可動式の輪状綜統2枚で構成された開口具。この複式輪状綜統型の開口具の設置方式では、一方の輪状綜統に奇数列のタテ糸、他方の輪状綜統に偶数列のタテ糸が通っており、一方の輪状綜統を引き上げることによってタテ糸の開口がおこなわれ、もう一方の輪状綜統を引き上げることによってタテ糸の逆開口がおこなわれる(図4)。このような開口方式は地機や枠機(写真8)のうちに見いだされる。

複合単式輪状綜統型
可動式の輪状綜統2枚と可動式の開口保持具2本、あるいは1枚で構成された開口具。この複合単式輪状綜統型の開口具の設置方式では、開口保持具に連結した踏み木を足で踏むことによってタテ糸の逆開口がおこなわれる(図3)。このような開口方式は高機のうちにも認められるが、そうした高機の中には、これまでにわが国で確認されているにとどまる(写真7)。